

五行歌

神崎悠依

きんもくせい
のふる庭や

色あせた
まちなみや

きつと
アラスカの
荒野でさえ

地球上
どこを探しても

みつからない
あなたへ

永
遠

あの子が
つらまえた
ひぐらしの皮に
宿っていた
夕陽がきつと

駅
の
か
な
し
み

離れゆくふたりを
見送った
まひるの
プラットホームに
だれもない

夢現に響く

灰暗い東雲に

雨戸をあけ

火を焚いてゆく

あしおとが

ひとつつきりで

摩天楼

浮かぶ窓への整然を

背伸びした誰かがやぶりました

雑踏もホームシックも

あまねくいとなみがいつしよになって

羽をやすめる背広の肩よ

ひとりぐらし

パンケーキひとふくろ
いつのまにひとりじめ
できちゃったんだろう
ぜいたくなゆめのまま
むねだけはいつぱいで

おすそわけ

果物をもらうと
うれしくてさ
誰と食べようか
考えるのが
うれしくてさ

呉服屋の睦月

娘たちが鏡のなかで
夢と待ちあわせている
迎えにきた父親が
だまって
下駄をそろえてやる

沐浴

ほしがりやの少年よ
真冬の曙光で
からだを洗ってごらん
なにより研ぎ澄まされた
ナイフになるから